

「容リ法改正」に関する講演会

東北大学大学院環境科学研究科 熊谷 将吾

2013年3月19日、日本大学理工学部駿河台校舎にて、プラスチックリサイクル化学研究会（FSRJ）協賛で「第10回廃棄物資源循環学会リサイクル研究部会講演会-容器包装リサイクル法プラの将来を新技术で考える-」が開催されました。新しいマテリアルリサイクル技術として、①「最新プラントのリサイクル率向上」喜田知克氏（エコスF）、②「廃プラからプラ原料へ（石油化学原料化技術の容リ法への応用）山脇隆氏（プラ処理協）による2講演、新しいケミカルリサイクル技術として、③「使用済みプラスチック微粉化による高炉還元材利用技術」浅沼稔氏（JFEスチール）、④「コークス炉化学原料化法の概要と発展性について」鍛取英宏氏（新日鉄住金）による2講演、新しい収集・選別・評価システムとして、⑤「容リ法プラリサイクルシステムの効率化提案」久保直紀氏（プラ推進協）、⑥「容器包装プラと製品プラの店頭回収リサイクル」百瀬則子氏（ユニー）、⑦「自治体における収集運搬等のあり方」藤波博氏（廃棄物研究財団）による3講演、3部門計7講演が行われました。その後、吉岡敏明氏（東北大学）、酒巻弘三（缶R協）、久保直紀氏（プラ推進協）、百瀬則子氏（ユニー）および藤波博氏（廃棄物研究財団）の5氏によるパネルディスカッション「あるべき姿」が開催されました。



1995年の容器包装リサイクル法制定から10年が経過した2006年、改正容器包装リサイクル法が成立しました。2013年度は容リ法見直しの年という事もあり、本講演会では様々な方面から活発な討論が交わされました。容器包装リサイクル法の上位法である循環型社会形成推進基本法では、「再使用」>「再生利用」>「熱回収」>「適正処分」と、循環資源の循環的な利用及び処分の基本原則としての優先順位が定められており、本講演会では、「再生利用」をいかに向上するかが焦点となりました。

マテリアルリサイクルにおいて、樹脂選別は再生品の品質やマテリアルリサイクル率に大きな影響を及ぼす重要な要素技術であり、ポリエチレン（PE）、ポリプロピレン（PP）およびポリスチレン（PS）を高度に選別可能な選別技術が紹介されました。また、混合樹脂にも対応可能な熱分解油化技術に関する講演も行われ、これまで問題視されていた塩化ビニル（PVC）においても、水酸化カルシウム（Ca(OH)₂）を添加することにより、熱分解時に発生する塩化水素の問題を解決できる事が報告されました。

ケミカルリサイクル部門では、容リ法プラを高炉還元剤として吹き込む際の微粉化技術、吹き込み時のガス化特性、コークス炉化学原料化に関する最新動向について紹介され、容リ法プラが高炉還元剤およびコークス炉原料の代替原料として、十分な性能を有することが報告されました。マテリアルリサイクル、ケミカルリサイクル共に、今後の容リ法プラ再生利用の可能性拡大を示すと同時に、PVCやポリエチレンテレフタレート（PET）への対応、再生品の用途拡大等の新たな課題も報告されました。

また、これまでの容リ法に関する統計データおよび現状報告から、次期見直しにおいて議論されるべき課題として、再商品化手法の最適化（材料リサイクル優先の撤廃）、容リ法プラ以外のプラスチックのリサイクル、各主体における分別収集や保管方法の更なる効率化等、収集・選別・評価システ

ムに関する新しい提案が行われました。特に、本セッションで取り上げられた提案については、パネルディスカッション「あるべき姿」でも議論され、パネラーと会場の間で活発に意見が飛び交いました。

”廃棄物”ではなく”資源”として有効利用するための技術開発、資源を効率的に回収・再利用するためのシステム作り、技術とシステムの双方がより発展し、資源有効化に向けて更なる努力が必要である事を認識しました。